

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）

渡辺 己



学位申請者 日高 晋介

論 文 名 ウズベク語における形動詞と動名詞による従属節について

結論

日高晋介氏から提出された学位請求論文「ウズベク語における形動詞と動名詞による従属節について」に関する、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致で博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会はアジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）の渡辺を主査に、副査として学外からサハ語をはじめとするチュルク諸語を専門とされている新潟大学准教授江畑冬生氏をお招きし、これに同じく学内からウズベク語を専門とされている島田志津夫講師、トルコ語ならびにチュルク諸語全般を専門とされている菅原陸教授、主任指導教員である風間伸次郎教授を加えた5名で構成された。

論文の概要

本論文はチュルク諸語に属するウズベク語の従属節に現れる形動詞と動名詞を扱った論文である。本論文は、インターネット上でも公開されている新聞記事から自作のコーパスを作製し、これによるコーパス調査とインフォーマント調査の両方を行っている。言語類型論的な観点と日本語学からの対照言語学的観点から、補文節、連体節、副詞節と広く従属節を扱い、豊富な例文を示しつつ、形動詞と動名詞の共通点と相違点を明らかにすることに成功している。

本論文の構成は以下のようになっている。

第0章では、博士論文の概要を示している。研究対象、研究史、背景と目的、構成、インフォーマントのそれぞれについて述べた後に、結論の着地点を示している。

第一部では、まず第1章で言語概説を述べ、第2章では、形動詞あるいは動名詞各々の形式について、先行研究の記述に従って意味と統語機能を整理している。その結果、次の形式を分析対象とした：形動詞過去 *V-Gan*、現在 *V-(a)yotgan*、非過去 *V-adigan*、未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*]、行為者 *V-(u)vchi*、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-masliK*]。

第二部の第3章（補文節）では、上位節述語に注目して分析を行っている。その結果、「発話を表す述語」「命題に対する態度を表す述語」「評価を表す述語」「知識と知識獲得を表す述語」「恐れを表す述語」「直接知覚を表す述語」「否定を表す述語」は形動詞

と動名詞のいずれによる補文節も取ることを明らかにした。他方、「ふりを表す述語」「願望を表す述語」「操作を表す述語」「モダリティを表す述語」「達成を表す述語」「局面を表す述語」は、動名詞による補文節しか取らないことを明らかにした。

第4章(連体節)では、主要部名詞に着目して分析を行っている。まず全ての形動詞は、主要部名詞を直接修飾する。このうち形動詞過去 *V-Gan*、形動詞現在 *V-(a)yotgan*、形動詞非過去 *V-adigan* の3つの形動詞は、他の形動詞と比べて、多様な主要部名詞を取ることができることを明らかにした。これに対し、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*] は限られた範囲の名詞しか取らず、固定的な表現か特殊な文体においてでしか用いられない。したがってその生産性は非常に低い。形動詞行為者 *V-(u)vchi* は、動詞 *V* の主語に相当する名詞のみを主要部にとるという制約があるが、形動詞未来 *V-(a)r* [NEG: *V-mas*] ほど生産性は低くない。

次に動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-masliK*] による連体節についての分析結果を示している。動名詞では所有複合による修飾のみが可能である。もっぱら主要部名詞とは「外の関係」をなす連体修飾節を形成する。ただし、主要部名詞と統語的な関係にあるように見える場合には、動名詞による連体修飾構造全体が1つの語彙に近い意味を表す。

第5章(副詞節)では、3対、6つの副詞節に対象を絞り、この6つの節それぞれにおいて動名詞および形動詞が示す機能を分析している。

まず、時間先行節「～した後に」と時間後行節「～する前に」についての分析結果を示している。時間先行節では、上位節による事態が起こる瞬間に従属節による事態が実現し、完了している。時間先行節には、形動詞過去 *V-Gan* のみ用いられる。したがって、形動詞過去 *V-Gan* による事態は、上位節による事態に先行し、かつ上位節事態より前に完了することを含意していると言える。一方、時間後行節では、従属節による事態が上位節による事態よりも時間的に後行し、上位節による事態が起こる時には実現していない。時間後行節には、形動詞未来否定 *V-mas*、動名詞 *V-(i)sh*、動名詞否定 *V-masliK* が用いられうる。したがって動名詞 *V-(i)sh* による事態は上位節による事態の後に起こり、この場合に動名詞 *V-(i)sh* は事態の実現には関心がない。否定形式については、時間後行節が表わす事態が実現していないために、これらの否定形式が用いられる。

次に、目的節「～するために」と原因節「～したので」についての分析結果を示している。目的節が主節時において未実現であるに違いない動機づけを行う事態を表す一方、原因節は主節時において実現されうる動機づけを行う事態を表すという違いがある(Thompson, Longacre and Hwang 2007: 250)。この指摘に従えば、形動詞(過去 *V-Gan* および現在 *V-(a)yotgan*) は原因節でのみ用いられるため、これらは実現されうる事態を表すと言える。実例を見ると、実際には上位節の示す時点までに「既の実現した」事態(過去 *V-Gan* による)あるいは上位節時に「実現中の」事態(現在 *V-(a)yotgan* による)を表している。他方、動名詞 *V-(i)sh* [NEG: *V-masliK*] は原因節と目的節の両方に用いられる。したがって、事態が実現するかどうかという点に関しては、動名詞は中立であると見なせる。

最後に、時間節「～時に」と条件節「～ならば」についての分析結果を示している。ここでは、過去形動詞+処格 (*V-Gan-da* [V-PTCP.PAST-LOC]) の例に注目している。本論文で

は、*V-Gan* による時間節および条件節が次の 2 点の特徴を持つことを明らかにした: 1. 一回的な事態を表すこと、2. *V-Gan* 節による事態が上位節による事態よりも時間的に先行していること。さらに、全ての抽出例が次の 3 つのパターンのいずれかに当てはまることを明らかにした: a. *V-Gan* 節と上位節による両事態が実際に実現された場合、b. *V-Gan* 節と上位節による両事態の実現を話者が想定している場合、c. 反実仮想を表している場合、の 3 つである。これに対し、上記 1. と 2. に当てはまらない節の述語、あるいは、上記 1. と 2. には当てはまるが a. ~ c. のいずれにも当てはまらない節の述語には、定動詞条件形 *V-sa* が用いられることが明らかとなった。したがって、過去形動詞 + 処格 (*V-Gan-da* [V-PTCP.PAST-LOC]) は、本来的には時間節で用いられると言える。

第三部第 6 章では各章における本論文の新しい知見を整理して示すとともに、今後の課題と展望をまとめている。

審査の概要及び評価

上記のように日高氏の博士論文は、新しい知見を多く示しつつ、ウズベク語の形動詞と動名詞の機能の異同を示したことにまず大きな価値がある。

本論文の内容に関して、各審査委員からさまざまな評価がなされた。各委員より特に高く評価されたのは、以下のような点である。

- ・訳とグロスを付した豊富な例文にもとづく分析によって、形動詞と動名詞の共通点と相違点を明らかにすることに成功している。
- ・インターネット上でも公開されている新聞記事から自作のコーパスを作製し、これによるコーパス調査とインフォーマント調査の両方を行っている。
- ・補文節、連体節、副詞節と従属節全般を広く扱っている。
- ・言語類型論的な観点と日本語学からの対照言語学的観点から分析し、多くの新たな知見をその証左となる例文と共に提示している。
- ・より良い論文とすべく、時間をかけて改稿を重ねた。

もちろん本論文にも改善すべき点が残されている。最終試験において、審査委員からいくつかの質問、要望が出された。その指摘のうち、重要な点としては以下のようなものをあげることができる。

- ・トルコ語の研究を参考にするのはよいが、ウズベク語の記述を精密にして、その成果からチュルク諸語全体に対して逆に知見を加えることを目指してほしい。
- ・日本語学や言語類型論の観点からの分析を行っているのはよいが、ウズベク語の分析に十分に生かし切れていない面もみられる。
- ・大部で意欲的な論考である反面、小さなミスも多く残っている。
- ・*-(u)vchi* が態の接辞を前にとる例はないとしていたが、インターネットからの用例であ

れば、いくつか見出すことができる。

- ・人稱を表示する接辞と接語の区別について、論文中での扱いに一貫しないところがみられる。
- ・時間的な関係に違いが出る、という点について、より丁寧な elicitation による客観的な論証が必要だったのではないか。
- ・本論文テーマに関わる「形動詞」「動名詞」「節」の定義が明確にされていない。

各委員からのこれらの指摘も、本論文の価値を高く評価した上で今後のさらなる研究の進展を期待したものであり、建設的な意見として提言を行っているものといえる。

最終試験における質疑においても、申請者の応答は的確で、委員たちとの間で学問的に興味深い議論が行われた。その過程から、申請者が指摘された問題点をよく自覚し、今後それらを解明していくのに十分な学識と強い意欲を持っていることが確認された。ウズベク語文法全般の記述研究の進展、さらにはウズベク語を含むチュルク諸語の記述研究・対照研究・類型論的な観点からの研究に関して、申請者の今後の活躍が十分に期待できる。

審査委員会は、学位請求論文の内容、ならびに最終試験（公開審査）の結果より総合的に検討した結果、全員一致で申請者日高晋介氏の学位請求論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。